

身体と意識の融和を目指した 科学的探究

現代科学はなぜ物しかないとする唯物論に向かうのか？
物心二元論を支持する科学の在り方は？
超心理学がその決め手になるかもしれない。

石川幹人

明治大学情報コミュニケーション学部

現代に特異的な唯物論的科学

文明の黎明期における人間はおよそ、物と心が渾然一体となったアニミズムの世界観をもっていた(図1の左側)。それが文明発展の途上で物と心は分離され、現代ではさらに心が忘れられつつある。結果として「世界には物しか存在しない」という唯物論が優勢になっている。こうなった事態の背景には歴史的偶然がある。いずれ将来、世界観は再度アニミズムに回帰し、物と心が融合した科学が発展するはずである。本稿では、すでに現れているその兆しをあぶりだしていきたい。

まずは唯物論が優勢になった歴史的偶然について述べよう。¹⁾物と心を分けて議論できるとしたのは、十七世紀の哲学者デカルトである。それ以来、物を探究する「物の科学」は、心を探究する「心の科学」と別々に発展した。物の科学は「自然科学」として充実し、電気製品や医薬品などの、文明生活に欠かせない恩恵を人類にもたらしたわけである。神の存在証明を試みるなど、「心の世界」の探究に熱心であったデカルトが意外なことに、今日では「自然科学の祖」と評価されているのだ。

一方の心の科学は、物の科学のように、生活を変えるような画期的な進歩をとげていない。十九世紀に哲学から分離した心理学は、心の科学としての期待を背負ったが、行動科学や脳科学と結びつき、「心の世界」の探究から離れ、物の科学にすり寄っていった。心理学が、自然科学のような発展を目指したが故である(図1の中央)。

そもそも心の科学では、心という研究対象が物のように客観性をもたないので、研究の再現性が乏しく、研究者間の合意をとることが難しい。また、心の状態は時と場合によって異なり、管理実験は困難をきわめる。心の科学は、この心特有の性質から客観的研究に手間がかかるため、発展に時間がかかるのは当然なのである。

現代は、物の探究が極度に進んだ一方で、心の探究が立ち遅れている特異的時代なのである。そのため、本来ならば心の科学の研究対象であるはずの領域に物の科学が侵入し、心が物として捉えられてしまう。それがこうじると、心は存在しないものとされるのだ。脳科学の現状にその典型事例を見ることができると、

人が自由に自分の意志で指を曲げるときに、その人の脳の信号をモニタした実験から、意志を決めた時点より〇・五秒も前に、指を曲げるための準備信号が脳内に出現していることが判

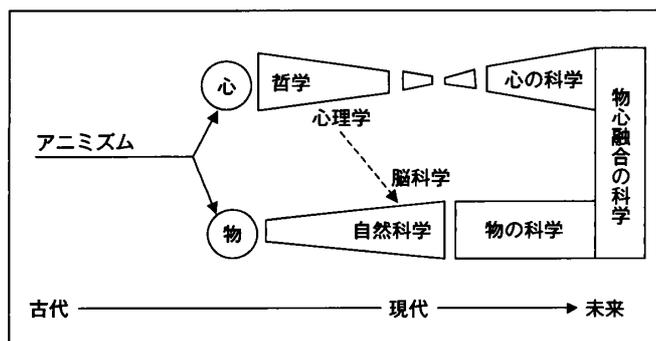


図1 科学的探究の歴史

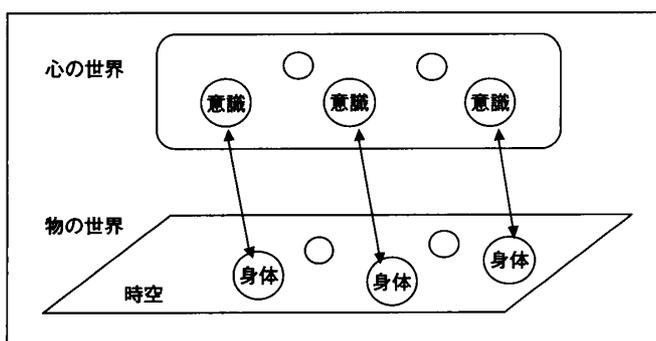


図2 物心二元論の世界観

自然科学が目覚ましい発展をとげたので、自然科学者は、心の影響が物に及ぶような現象は存在せず、「物こそ全世界」という世界観を主張するようになった。先の実験結果のように、「指が曲がる原因」を物の世界の中に探してしまふと、「準備信号」などの物的現象が発見されてしまふ。探究の仕方が、そもそも物の科学の方法

物心二元論による科学的探究

種々の倒錯が起きているわけだ。

になつていたので、あたりまえとも言える。しかし、我々は一般に心の存在を自覚し、「心の世界+物の世界=全世界」だ(図2)と物心二元論の立場をとっている。その世界観においては、「指を曲げる意志」という「心の世界の要素」が、「指の運動」という「物の世界の要素」に影響する。そうだとすれば、両世界は完全に別々な存在ではなく、相互に関わりをもつていくことになる。

将来、意志や意図、意欲や熱情までもが記述され、深く探究されるまでに心の科学が発展することが期待される。そうした暁には、その両世界の関わりが科学的探究の俎上に載ってくるだろう。物と心が連関して語られる「物心融合の科学」が幕開けるにちがいない(図1の右側)。

物心融合の科学が具体的にどのような姿をしているかを推測するには、心の科学の発展を待たねばならないが、相互連関の要が「身体」と「意識」の間にあるのはまちがいない。まさに「指」が「意志」によって曲がるという事態の説明が、物心融合の科学によって適切に行なわれるべきなのだ。

しかし、相互連関を「人間の身体」と「自覚的な意識」の間のみであるなどと、限定するのはよくない。人間らしさの根源を他の生物に求めることもできるし、先に述べたように、無意

明した。こうした実験にもとづいて脳科学者は、指を曲げるといふ意志は「指を曲げる源」ではなく、単なる幻想だと見なしている。脳の無意識的部分が「指を曲げる処理」を進行させた結果を見て、脳の意識的部分が「自分の意志で指を曲げた」と思いこんでいるにすぎないという。²⁾

我々の常識的考えからすると、「指を曲げる意志」は典型的な心の働きである。「心の世界」にげんに存在するものと感じられる。それを「幻想にすぎない」とか「実際にはないものだ」などと主張されても、容易には納得できない。右の現象も、無意識的部分も意識の一部だと

解釈すれば問題はない。スポーツや音楽に熟練している人々は、創造的なパフォーマンスの一部は無意識に行なわれていることに同意するだろう。

これまで自然科学は、物の世界の森羅万象を理論的に説明することを目指し、ある程度の成功をおさめてきた。物の挙動の説明に際して、心を想定しなくとも問題がなかったのである。そのため脳科学者をはじめとした自然科学者は、「じつは心の世界は無かった」などと豪語するに至った。そこでは、自分の心の存在を自覚しながら「心は無い」と自ら主張する、ある

識的とされる行動にも知性を見いだすことができる。「身体」とは広く「生命体」へと拡張すべきであり、「意識」には無意識とされる「弱い意識」まで含めるべきである。この辺の展開は、アニミズムへと通じた発想と言えよう。

見え始めている兆し

自然科学者は唯物論の世界観をもっている中で、心の世界が物の世界に影響する事実を目をそむけがちになる。実験や観察をするときは「無心に行なえ」と、心を積極的に排除さえする。ならば、自然科学のうえで未解明とされる現象に、じつは心の世界が関わっているという事態があつてもおかしくない。

筆者は、人という生物が進化してきた歴史に、心の世界の関わりが見いだせるのではないかと考えている⁴⁾。細菌のような下等生物から、わずか三十数億年で複雑な行動がとれるサルの間が進化してきたのは、偶然の環境適応にしては効率が良すぎる。生物の身体と一緒に意識も進化してきたという「心の世界の進化」も併せて考えることが、きわめて合理的である。生物進化が人間に至るにつれて、複雑な組織体への進化が速まっていることが、意識機能の充実という観点によって説明できそうだ⁴⁾。

また自然科学においては、物の挙動は機械的な物体運動であり、心の影響が入りこむ余地がないように考えられている。心からの影響があるとすれば、物的な原因に加えて心的な原因もあることになる。両方の原因がどのように折り合うかが説明されねばならない。これは「二重因果の問題」という哲学的難問であつたため、哲学者でさえも物心二元論を積極的には主張しづらくなつたのである。

現在の主要物理理論における時空は、時間と空間を合わせた4次元だが、それを単純に5次元や6次元に増加させても、心の世界を語ったことにはならない。心の世界が「どのように時空を含めた物の世界と関わるか」という問題こそが、説明されるべき対象である。

この点で筆者は、現代物理学の観測理論に期待を寄せている。観測理論では、物的挙動の多様な可能性が重ね合わせになつた状態において、「観測」という行為によっていずれかの状態に決定するとされる。この決定は、理論的に導出される確率に従つて決まるので、同様の観測を多数回行なえば、確率に従つた統計的確定現象である。しかし、観測が1回だけしか行なわれなければ、不確定な現象にとどまる。加えてその観測は、物の世界の「外部」⁵⁾によってなされるという解釈が可能なのである⁵⁾。

その外部とは「心の世界の主要要素としての意識だ」と考えることにより、進化の高速化の問題が説明可能になりそうだ(図3)。意識内容に現れる「意味」が異なる時空上の物体運動の重ね合わせを、相互に関連のある「意味ある形」で決定する作用をもつと考える。たとえば、生物体の身体特性が重ね合わせになつた状態から、環境(これも重ね合わせ状態にある)に適応的な特性の観測確率が上がるのだ。これにより、物体運動の重ね合わせを決定する不確定な物理現象に限って、意識の影響が確率的に起きると説明でき、「二重因果の問題」を回避できる。

超心理学の意義

今日、自然科学を指向する哲学者が「指を動かそうとする心の働きが指に影響を与えられるとするならば、指だけでなく小石だつて動かせるはずである。小石は心で直接動かさないのだから、心の世界などはなく、心とは脳の物的な働きにほかならない」という趣旨の主張をして、脳科学を擁護するほどまでになっている。心で小石を直接動かすことができたなら念力になるのだが、そんな超能力は存在しないという前提で哲学が語られている。自由な発想が重視

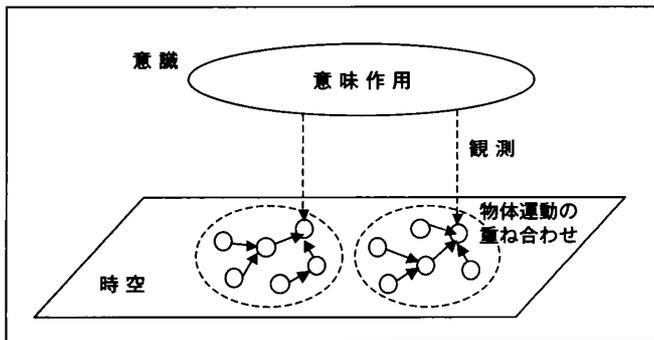


図3 現代物理学の物心二元論的拡張

それは物の世界と関わる現象が具体的に示されているとも言える。その意味では、物心二元論にもとづいた唯一の科学とも言えよう。ところが、心の世界の存在や、両世界の関わりを想定してない自然科学

される哲学でゆゆしき事態が進行しているようだ。心はあらゆる物体に影響を与えるのだけでも、人はふつう自分の意識は自分の身体だけを動かすようにしているのではないか。他人の身体を動かしては社会的にたいへんなことになるからだ。それでも、ときどき間違っただけの身体外の小石などを動かしてしまふことがあり、それが念力と呼ばれる可能性がある。

念力などの超能力を研究する「超心理学」という研究分野がある。念力の証拠はまだ十分ではないが、透視やテレパシー、予知の実験的証拠はそろっている。(6) 心の世界が独自に存在し、

者は、「超心理学は非科学的だ」とか、「超心理学はオカルトやキワモノの類だ」などと、歪曲した批判をくり広げ、見いだされた重大な証拠を封印しようとする。まさに自分の世界観に合わないものを排除する、科学者らしからぬ態度が横行しているのである。

実験的な証拠を説明するのが科学の基本である。証拠があるのなら、それを説明する仮説を考えるのが科学的態度である。超能力現象は現在の物理理論では説明できないが、図3に示したような「拡張された理論」ならば説明も不可能ではない。たとえば、ある時空位置で確定する透視対象と、別の時空位置で決定される透視報告が、意味作用を通じた観測で相関的合致を起こすというわけである。

このように仮説を立てていく超心理学は、疑似科学では決してない。あえて言えば、科学としての承認がいまだになされていない「未科学」なのである。

将来、物の世界が身体のところ、意識を通して心の世界と融和的な関わりをもっているという世界観が、もっと注目されるだろう。人々が古くから素朴に抱いていた世界観でもある。その世界観をもとにした物心融合の科学が発展し、人類の福祉に多大な貢献をすることが期待される。現在、その融合科学の発展に向かう手

がかりは、超心理学研究の中に数多く眠っているのだ。

●注

- (1) より詳しくは、石川幹人・渡辺恒夫編『入門・マインドサイエンスの思想』心の科学をめぐる現代哲学の論争』（新曜社）を参照されたい。
- (2) この実験の解釈については、ベンジャミン・リベット『マインド・タイム』脳と意識の時間』に議論がある。
- (3) より詳しくは、石川幹人著『人間とはどういう生物か』心・脳・意識のふしぎを解く』（ちくま新書）を参照されたい。
- (4) 意識の進化については、ケアンズリスミスが『ハ心』はなぜ進化するのか』心・脳・意識の起源』（青土社）で議論している。
- (5) 観測主体の外部性については、デスパニー『現代物理学にとって実在とは何か』（培風館）に議論がある。
- (6) より詳しくは、石川幹人著『超心理学』封印された超常現象の科学』（紀伊國屋書店）を参照されたい。

いしかわ・まさと

一九八二年東京工業大学理学部応用物理学科卒業。新世代コンピュータ技術開発機構などを経て現職。博士（工学）。著書に『心と認知の情報学』（勤草書房）、「だまされ上手が生き残る」（光文社）、「超心理学——封印された超常現象の科学」（紀伊國屋書店）など。専門は、認知情報論および科学基礎論。